山行記録抜粋

35 年度　積雪期北鎌尾根から前穂高岳縦走、遭難報告
36 年度　厳冬期前アルプス全山縦走
37 年度　積雪期栂池―鹿島槍ケ岳極地法登山
38 年度　積雪期明神岳五峰から奥穂高岳
39 年度　積雪期槍ケ岳北鎌尾根から西穂高岳縦走
40 年度　厳冬期五竜岳遠見尾根から鹿島槍ケ岳・五竜岳北尾根
41 年度　残雪期鹿島槍ケ岳周辺強化合宿
42 年度　厳冬期北葛尾根および七倉尾根から針ノ木岳
43 年度　厳冬期赤沢山東南尾根から槍ケ岳・燕岳
45 年度　厳冬期涸沢岳西尾根から西穂高岳・前穂高岳・明神岳
47 年度　積雪期知床半島縦走
47 年度　積雪期飯豊連峰縦走
48 年度　厳冬期剱岳北方稜線縦走
49 年度　厳冬期涸沢岳西尾根・前穂高岳北尾根から奥穂高岳・北穂高岳
50 年度　厳冬期朝日岳から白馬岳縦走
51 年度　厳冬期奥大日尾根から剱岳・立山
52 年度　厳冬期黒部横断
53 年度　厳冬期笠ケ岳から槍ケ岳縦走

地域別山行記録　我が部と北海道の山々

昭和35年度
（1960）

積雪期北鎌尾根から前穂高岳縦走、遭難報告

昭和36年3月28日～4月13日

後藤紀彦

はじめに

今は亡き二先輩にかわって、私がこの悲しい記録を記さねばならぬということは断腸の思いである。

しかし私を除いて他に誰が縦走隊の行動を書き得よう。

私は山の記録とはどこまでもドライな、云はば機械と変わらない時間の積み重ねであってはならぬと思う。しかしそれがあくまで紀行文ではなく公の報告の形をとる時はある程度私的な感情を押さえなくてはなるまい。

この報告の内に、所々私の思い出といったものがあったとしても、この際はお許し願いたい。

参加メンバー

CL　岩本　尹也
　　伊藤　国啓
　　後藤　紀彦

〈準備〉

3月24日・25日

食料と装備の準備に大忙しする。やっと準備完了

3月26日・27日

26日出発の予定であったが、折しも降り始めた大雪は、雨を混じえて2日間も続いた。止むなく松本にて沈殿する。この雪は今後の計画に大きな影響を与えた。

〈装備〉

テント　3人用 マナスル型
ザイル　40m ナイロン 1
　　40m 麻　1
三つ道具　カラビナ　12（古カラビナを含む）
　　ハーケン　岩用　15
　　氷用　4
　　ハンマー　氷用　2
　　すてなわ　3
ラジュース　1、コッフェル　3、
ノコギリ、ナタ　各1
食器　10
石油　4リットル、マッチ、ローソク　若干

〈個人装備（共3人）〉

オーバーシューズ、ウインド・ホーゼン、ヤッケ、ピッケル、アイゼン（岩本、後藤－門田、伊藤－R.C.C.）、シュラーフ（始めて部で購入した化繊シュラーフ使用）、エアーマット、セーター、ジャンパー、その他

※個人装備、団体装備共に軽くする事を考えて、化繊シュラーフとナイロン・ザイルを購入した。この2つは著しく重量を軽くしたが、個人装備はどうしても多くなり、又、三つ道具等もデポ

の分と重複して、やけに多くなってしまった。

〈食糧〉

他の2サポート隊とほぼ同じ内容のものであった。

朝－モチ、野菜、かんづめ等の雑煮

昼－ビタパン一人2個にマーガリン1/2本

夜－生米に、肉類を主にしたおかず

※従来と全く同じ内容の食糧であり、その上余分なものが多く途中で沢山捨ててしまった。雑煮のダシのかんづめ、天ぷら油、マーガリン、パン等である。

特に昼食は雪山の乾いたノドには全く通らず、苦労した。その上、これもデポと重複した所が多く、非常なカサと重さになってしまった。

今後食糧（特に雪山における軽量化）については、充分研究の余地がある。

行　動

3月28日　（快晴）松本→湯俣

すっかり準備を整えて、26日出発の予定であったが、25日夕刻からの雨が27日午後より雪に変わり、27日の夜迄降り続く。松本で23cm、21年ぶりの春雪とか。止むなく出発を延期。この雪が今後の計画にも大分影響して稜線に出る迄は春には珍しい大変なラッセルを強いられた。国啓さんが「皇太子夫妻が長野県訪問のせいだ」となげくことしきりであった。

28日、ここの所毎日早く起きて飯を作ってくれたサポートの人達に見送られて出発する。大雪なので心配だったが、バスは平常通り葛温泉迄入っていた。金のかかる里を去ってほっとしたのもつかの間、重い荷を背負って歩かねばならぬ。

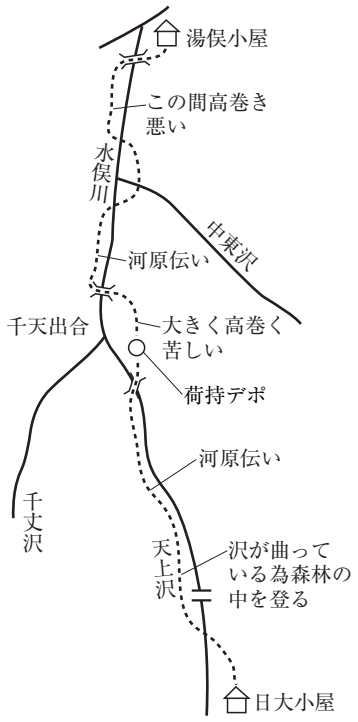
荷は各自8～9貫程、第5発電所迄は踏跡はあったが、後はヒザ迄もぐる雪道の上に、所々道が崩れていて高巻きさせられる。あの雪が降らなければ、と時々雪煙をあげている急峻な山々を見上げるが、どうにもならぬ。湯俣に着く頃は真暗になって、全員フラフラしていた。途中濁小屋でソーセージを拾ったことはせめてもの慰めだ。

湯俣では本館にもぐり込み、ネズミと一緒に寝る。岩本さんが買ってきたオーシャン、何とも云えずうまかった。

松本6：52電車 大町8：00～8：05バス 葛温泉8：55－七倉沢9：45－三ノ沢橋11：45－濁沢の小屋12：30～1：45－東沢発電所2：40－湯俣小屋6：20エッセン8：20就寝10:00

3月29日（快晴後曇、無風）

昨日の様に靴の中に水がたまったりしたら沈痛だと、皆オーバー・シューズにワカンをつけたり、アイゼンをつけたり、思い思いの支度をして出発する。橋を渡って水俣川に入ると、たちまち難路ばかり。岩壁やイヤな雪壁をブッシュにつかまって高巻きして行く。古いステップがあったが、ともかくイヤな所だ。中東沢のあたりからはどうやら河原伝いに行ける。一度右岸へ移ったまでは良かったが、左岸へ移るのに大苦労する。ずっと左岸ばかり行った方が良いようだ。ワカンを付けてフウフウ歩くと吊り橋に出る。春の雪は重くて暑い。ここから岩壁になっていて河原伝いに行けないので対岸の斜面を100m程登って巻く。非常に



水俣川概念図

サラサラの雪で足場ができず、気息エンエン、四つんばいで這い上る。そこから水平に森林の中をトラバースして行くとやっと天上沢の下部へ出た。荷物も重く、とても今日中に日大小屋迄行けそうにないので、さしあたって不必要な荷をここに残して、明日取りに来る事にする。

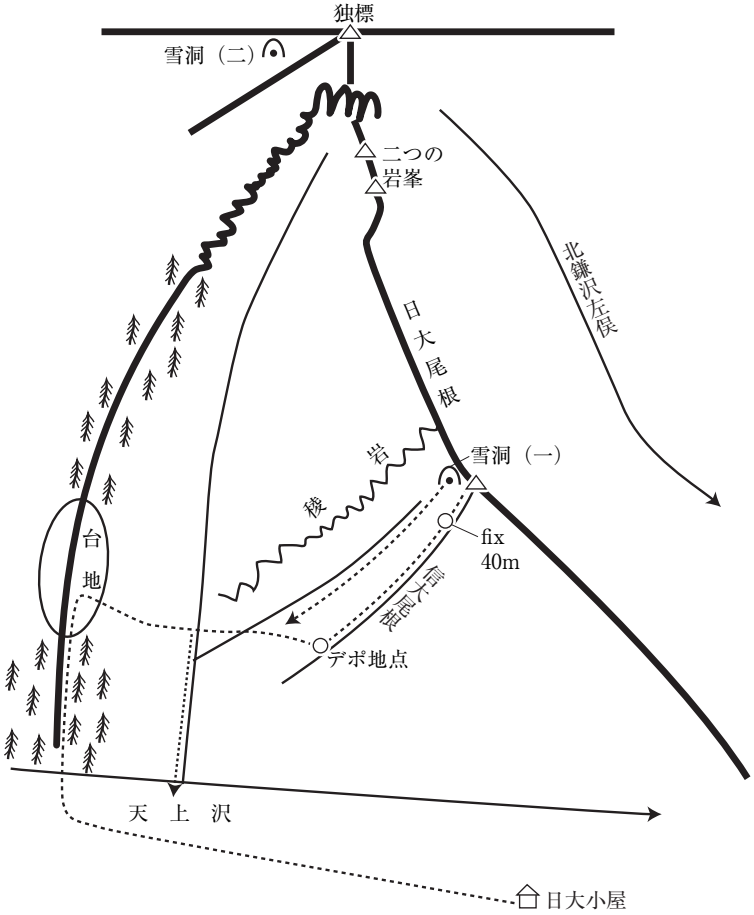
天上沢第一の吊橋を過ぎてからは高巻きする必要もなく、殆んど河原伝いに行ける。

国啓さん、持前の馬力をだしてラッセルしてくれる。幸い雪も幾分クラストしてきて、ワカンが快適にきく。途中で豚みたいに丸々したカモシカにお目にかかる。北鎌側の小さなガリーからはデブリが一杯出ていた。ビンボー沢の出合いは対岸の台地を通る。再び本流に出ると広い河原を夕方の風が吹き通している。真近にあまりに高く独標の一部と槍の穂先がそびえている、夕日に真白に光りながら。北鎌沢のビルディングの様なデブリに驚きながら小屋につく。2日間苦闘したのでクタクタだ。2～3mの雪が小屋の上に積もっているので、「つぶれはしまいか」と危ぶんだが、どうせつぶれるならと風通しの少ない炊事場の方で寝る。ボロ小屋でも雪は殆ど吹き込んでいず、暗いだけが欠点だ。秋に荷揚した石油カンを前のシラベの木よりおろして、うまそうな物をむさぼり喰う。喰う物は一杯あるので皆ニコニコしている。

起床6：00出発8：00中東沢出合いで昼食10：10～45大鎌沢の出合い11：40水俣川最後の吊り橋1:00千天の出合いの上に荷物をデポする2:00～2：30天上沢の吊り橋（中食）3：15日大小屋5：40エッセン8：00就寝9:00

3月30日（朝方は雲っていたが、まもなく快晴、西の風強し）

朝起きたが、思わしくない天気なので、これ幸いと寝ていると陽がさして来たのでしぶしぶ出か



日大尾根概念図

ける。連日のアルバイトで足腰が痛い。のんびりと昨日のデポを取りに行く。春の水辺をポカポカ往復する。昨日の苦闘が嘘みたいに楽だった。小屋に戻ってエッセンを整理する。装備全部とエッセン4日分を日大尾根の途中まで上げることにして出発する。一人4～5貫目程。小屋から天上沢を500m程つめ、右手の広い雪の台地目がけて森林帯を選んで登る。この台地は日大尾根より流出する沢の一部を成している。台地の右手の尾根は日大尾根の派生尾根では比較的大きい方だと思う。

我々には日大尾根への取付点がはっきりしなかったので、北鎌沢出合いからつめるよりも、中腹へ取付いて楽をしようと思ったのだ。こんな甘い考えが、後で非常な苦杯をなめる事になろうとは思わなかった。尾根の下部はゆるく、雪も軟らかかったが600mも登ると非常に急斜面になったのでワカンでは歯が立たずに、荷をデポして帰る。帰りは森林帯ではなく、沢を降りてみたが、デブリでゴロゴロして非常に歩きにくかった。

起床7：00出発10：00～前日のデポ地点11：20～日大小屋に帰る1：30荷をまとめ出発2：30～広い谷をトラバース、右手の尾根に取付く3：30～尾根上に荷をデポする4：30～日大小屋へ帰る5：40就寝9：00風の音強し

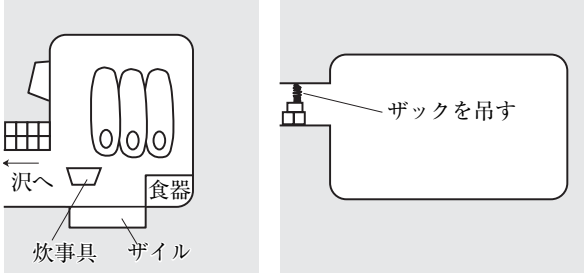
3月31日（快晴）沈殿

3日間の連日のアルバイトの疲れを取る為に休養する。暗い小屋の中で寝袋にもぐったり、外に出て白銀の槍を眺めたりして、楽しく一日を送る。こんなに素晴らしく晴れているといささか後ろめたい気がする。小屋の雨だれを石油カンに受けたりして、暇だと色々の事をやっている。槍の穂が春の強い光の為、天上沢の雪面に美しい陰影を作り出す。とても我々の近づけそうもない程すごみのある美しさだ。

4月1日（快晴、無風）エイプリールフール

朝日の当たらないうちに沢を登ってしまう為に早立をする。今日は小屋からアイゼンで行く。前日のデポ点迄は沢をトラバース。時間を省略する。デポで40m麻ザイルのみを荷に加え尾根通しに登る。

無雪期には一面に大木の茂り合った尾根らしく、我々はその枝の上をすっぽりおおった雪の上を行く。時々落ち込むとすっぽり首迄はまってしまう。それに所々いやな氷化斜面や、オーバーハング状に雪塊の引かかっているところなどがあって、一足、一足、足場をピッケルで作らねばならぬ。国啓さん一人で大奮闘。木にぶら下がったり、グサグサの雪にピッケルをさしたりして大変な苦労だ。その上、尾根の最上部には枯木の上に雪がキノコ状にのっかっていて、その下を通過せねばならぬ。40mのザイルを固定して、雨の様にシズクの落ちる雪塊の下をオッカナビックリ念仏を唱えて通過する。おかげで木の根元にカモシカの寝床らしきものを見付けたが、これでやっと日大尾根の主脈と合した。散々苦労して登っただけに正直な所うれしかった。恐らく誰も通った事のないであろうこの尾根を“信大尾根”と命名して三人悦にいる。もうブッシュに悩まされる事のない、スッキリした雪の尾根にうれしくなってしまい、ジャンクションの少し上に雪洞をほる。岩本さん、国啓さんは雪洞堀り。後藤は岩峰の下までラッセル。ずっと軟らかい雪でヒザ上迄あるが、淡々としたものだ。岩峰の上の壁が問題だろう。雪洞に帰り、掘るのを手伝う。雪は多いので十分な大きさの物を堀り上げる。雪洞が完成してから、デポを取りに行く。尾根を降りるのは危ないし、時間もくうので、真下の沢を下りてしまう。非常に急で(50度)、いくら雪洞のブロックを落としたあと



雪洞中の様子

で、雪も硬く、日もかげっていた、とは云っても賢明ではなかった。折角安全の意味で尾根を通ってきたのだから、あくまで尾根通しにすべきだった。帰りは尾根を登る。

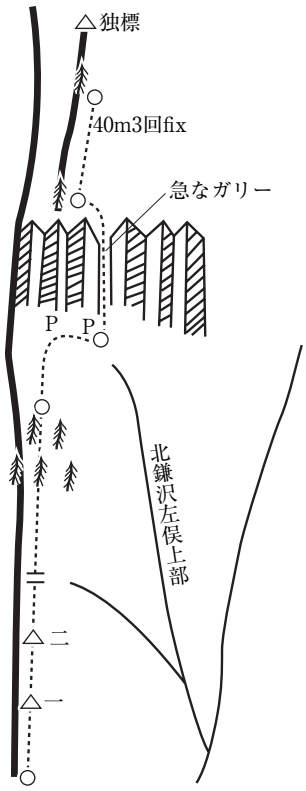
今日もフルに動いたので非常に疲れた。こう毎日往復していては３人で極地法をやっている様なものだと笑う。初めて高い所で寝たので夜中はかなり寒かった。やはりこうなると羽毛の寝袋が恋しくなる。

起床３：15 出発５：50 ～前日のデポ地点６：50 ～日大尾根へ出る 11：00 雪洞完成後荷を取りに出発～デポ２：35 ～再び雪洞に戻る４：00

４月２日（雪、昼頃より晴れ）沈殿

寒い夜が明けてみれば、外は雪降り、天気予報なんて当てにならぬ。

昼迄グウグウ寝て目覚めてみると青空が見え出した。荷上げに出ようかとの話もあったが、完全に晴れ上がったのは２時すぎなので止めにする。入り口の雪を除けていると、表銀座の稜線から盛んに雪煙が上がっている。新雪 30 ～ 50cm、洞内は湿気多く、炊事の際にはポタポタ落ちる。高度の低いせいだろう（2500m 位）。洞内－2℃、洞内の雪温－1℃



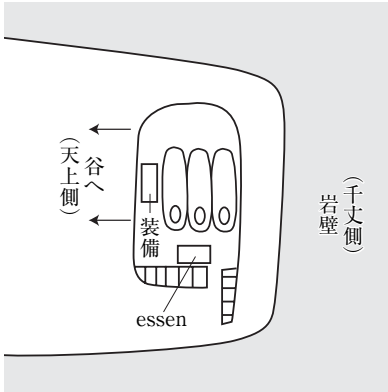
北鎌沢上部概念図

４月３日（無風快晴）

ノロノロと仕事をしたので出発はすっかり遅れてしまう。素晴らしい天気だ。昨日の新雪の為ヒザ迄のラッセルだ。第一、第二の岩峰はなんなく乗り越えた。ただ急な雪稜を登り下りするだけだ。独標奥壁もガリーを越すルートが見つかったので、思ったより楽に越せた。ただ足下よりスッパリと切落ちている北鎌の斜面はすごかったし、荷物を吊り上げようとモタモタしていたら、北側のせいか凍えそうに寒かった。ガリーを抜けてからも 70 度程の雪稜なので慎重に登る。

団子になるアイゼンにイライラしながら登り切ると独標だった。雪洞は大槍へ向かって一つピークを越した所に掘る事に決めて、疲れた体にムチ打って再び朝の雪洞迄残りの荷を取りに戻る。北鎌の尾根に戻って来た時には、もう日は西に傾き、眼下の裏銀座の山々は鈍く光っていた。大急ぎで雪洞を掘る。稜線の急にたるんだところに掘ったので労せずして出来上がった。既に星のまたたき始めた外にお別れして、洞内の人となる。明日はあの槍を越えるのだ、と全員大張り切り。

起床３：40 出発７：10 ２つの岩峰を越える８：40 ～奥壁を抜ける 12：00 ～雪洞予定地１：10 ～ 30 ～日大尾根の雪洞に戻る２：30 ～雪洞予定地に帰る４：10 ～雪洞完成６：30



雪洞中の様子

4月4日（晴後強風）

朝方より不気味な天気だ。昼迄には槍を越してしまおう、食糧2日分だけで、5貫位の荷で出発する。

4月に入ったせいか稜線は夏道が出ている所が多く、その上小ピークは千丈側を行くことができるので非常にはかどる。国啓さんに云わせると11月初旬の偵察の時より歩き良いとの事だ。岩は全く乾いているし、雪も適度に硬く最良のコンディションだ。目前に迫って来る大槍の姿をにらんで2、3度休む中に槍の基部に来た。2、3ヶ所ザイルの欲しい所もあったが、使わずにすませてしまった。ここから上はさすがに急で雪も硬く、荷を背負っては登れない。国啓さんが一人で空身で登っては張ったザイルを頼りに我々二人が続く。国啓さんは自分で荷物を背負い上げまたザイルを張りに登って行く。全く彼の一人舞台だ。私の手伝う隙も無い位、見事に処理して行く。40m 3ピッチ半目に頂上の社の所へおどり出た。

大槍の登りはさすがに急で悪かった。雪もアイゼンを受けつけぬ程だった。だが全ては過去の事だ。遂に我々は北鎌尾根を登り切った。風の吹き通す頂きも最良のいこいの場所だった。我々は高揚した気持ちで下りにかかった。ところが肩ノ小屋に面した夏道の下りは、ものすごい風だった。荷物を持ってはとても危ない。ザイルをダブルにして投げおろしても、軽いナイロンは風にあおられて、あっと云う間に高瀬川の断崖の方へ吹きあおられてしまう。悪戦苦闘して6ピッチ目にやっと下り切る。肩ノ小屋は無人だった。槍沢サポート隊の荷と山田さんの置き手紙があり、昨日ボッカに来た由。

夕食は甘い汁粉とラーメン。サポート隊に限りない感謝を捧げる。小屋がきしむ程の風の音を聞きつつ眠りにつく。

出発6：30～大槍の基部10：00～槍ケ岳12：00～肩ノ小屋3：30

4月5日（強風雨）

昨夕からの風雨、沈殿

もっとも、天気が良かったとしても出発したかどうか、怪しいものだ。食い物は沢山、予定コースの半分は来たと一日中馬鹿ばかり云って暮らす。

4月6日（曇、ガスと強風）

昨晩は風の音が一晩中小屋の窓を叩く。今日も沈殿。真白に凍りついた窓ガラス越しに、一面に氷がついた槍が見える。また冬に逆戻りだ。

午後より再び猛吹雪、真夜中迄3人で思い出話にふける。部の誰かれの事、合宿の思い出、ノロケ話、〇〇談、等々

思えば3人でこれ程色々な事を話した事は初めてだった。最初にして最後の歓談だったのだ。午前2時、ふと話がとぎれると風の音がしない。慌てて窓から見上げると凍る様な月がコウコウと白い山を照らしていた。

4月7日（無風快晴）

翌日、起き出したのはなんと10時頃。素晴らしい天気だ。「沈殿するのに理由なんているもんか」とは国啓さん。でもいささか後ろめたい。始めの予定では好天が2日続かねば行動せぬつもりだった。大キレットを渡って穂高小屋迄は順調に行って2日。その間出来るだけ荷を軽くする為に2日分の食糧で突破するのだ。ラジオは明日小低気圧が出ることを告げている。だとすれば大いばりで沈殿だ。小屋の屋根でトカゲをきめこむ。雪面は吹き荒れた風雪のためカリカリに凍っている。穂先の氷がひっきりなしにカラカラと金属のヒビキをたてて滑ってゆく。世界一のサン・ルームだとうぬぼれる。

1時頃、山田隊が槍沢の下に黒い点になって現れる。荷が重くて苦しそう。皆黒くなって、すこぶる元気。連れ立って槍に登る。遠くから見ると真っ白に氷が付いたかの様だが、触ると皆落ちてしまう。

夜はにぎやかに食事をする。急に小屋が暖かになった様だ。

4月8日（高曇り）

3時に起きて見ると月が笠をかむっている。今

日も駄目だ。一日飲んだり、喰ったり、騒いだり。槍沢でストップジッヘルの練習をする。制動確保なるものを初めて知る。実に効果的だ。

4月9日（ガスと小雪）

今日も思わしくない。幸い食糧はたらふくある。まずは喰うことだ。

午後吹雪をついて劔岳より来た北大の連中と同宿する。彼らが真白に氷を付けてヌッと入って来た時は、さすがに皆おし黙って、間の悪そうな顔をしていた。

明日は晴れるぞ。

4月10日（無風快晴）

予想通り素晴らしい天気だ。一斉に準備をして出発する。穂高へ向かう我々、裏銀座へぬける山田隊、下山する北大隊と、いつもの事ながら山での別れは感傷的だ。

息もつけぬ寒風も大喰岳を越す頃から治まり、春山らしいポカポカした日になる。雪面は雨でカチカチにクラストした上へ、昨日の新雪が吹きつけたので適度な硬さだ。中岳、南岳の広大な雪原にアイゼンを鳴らして行くのは良い気分だ。行手に北穂高岳頂上の雪壁が陽を受けて、高く鈍く光る。一昨年の横尾尾根の経験から、「ここが硬雪だったら、荷を背負っての突破は極めて困難」と云う岩本さんの意見だったので3人は何度も不安げに眺めた。南岳の下りは、新雪が不安定についていたが、ほぼ夏道通りに通過。上のハシゴへの降り口が悪い。ザイルを出せ、出さないで国啓さんと私の間で大分もめた。いつも難場へ来ると2人の間で感情の衝突が起こる。冬の北尾根三峰の下りでもやってしまった。キレットのナイフ・リッジは2､3ヶ所非常にやせていて､またいで通る。風が吹いていたら、とても通れまい。いよいよ北穂高岳の登り。夏道のペンキ印を頼りに第一の鎖場まで登り、後はリッジ通し。2、3ヶ所の氷化した部分を除いてはアイゼンが刺る程の硬さだったので大分楽をする。最後の雪面の登りは殆んど足場を切った。国啓さん一人で大奮闘。下から見たらテラテラ光っていたので、大分心配したが表面のみのクラストなので楽しかった。とはいえ膝のつかえる程の急斜面を、春の日にジリジリ照らされて登るのは決して楽ではなかった。頂上直下のゆるい斜面でやっとほっとする。

眼の下には春の午後に、べっとり雪をつけた涸沢の圏谷が眠っていた。目を凝らしても人影はない。キレットの底から一度休んだだけなので頂上にどっかりと腰をおろしたまま、誰も動こうとしない。ザイルは結ばなかったがもし用うるとすれば取付きで用意せねばならぬ。硬雪の斜面では荷を下ろす場所がない。まだ日は高いが、穂高小屋迄行く元気はとてもなく、北穂の小屋を掘るのに専念する。国啓さん独特の勘で2m余の雪の上からピタリと掘り当てる。湿っぽい臭いのする小屋で先日下山した越冬者の石油コンロを使って炊事をする。久しぶりの労働にグッタリしながらも、最難関を突破した喜びに話ははずんだ。

起床4：00、出発6：30～大喰岳7：00～中岳7：45～南岳8：45～南岳を下り切る9：45～キレットの底（昼食）10：50～11：20～飛騨駈12：15～北穂の肩1：00～北穂高岳頂上2：40～小屋に入る3：30

エッセン5：30、就寝6：30

4月11日（晴後曇）

今日はサポート隊に会えるぞ、とはり切って小屋を出る。一日分の食糧だけなのでザックは軽い。南峰の登りはキレツの入った涸沢側の雪面を目をつむって通過。

後は尾根通しが最も能率が良いようだ。滝谷側は高度感がありすぎて快適な斜面があっても荷をかついでは安心して通れない。涸沢側は雪がくさってステップが崩れる。涸沢岳の最低コルのすぐ上で一ヶ所滝谷側の狭いバンドをトラバースする。先登を試みていた国啓さん、「あっ」と云う声と共にピッケルを落としたが、何たる幸運。大事に至らなかった。また、10m程下の硬雪にピッケルを出そうとした岩本さんのザックから今度は非常食が転がり出た。一瞬時に滝谷の奈落の底へと消えていった。この二つの事と後に起こった遭

難事件を考え合わせると何か心に残るものがある。私はこれ以来何事も偶然の一事でもって割り切るには釈然たらざるものを感じる。

くさっていた我々は、思いもかけず最低コルで涸沢サポートの葛西、出島に会い、飛び上がって喜ぶ。岩本さんの第一声「モクをくれ！」。嗚呼、悲しき動物かな。タバコ飲みよ。小屋に「モク」があると云う事を葛西より聞いたので、自分は先に着いて空にしてやろうと思った。涸沢岳直下はかぶり気味で相当に悪かったが、葛西達のステップがあり助かる。一気に小屋に駈けおりて、口を酸っぱくして、「モクを出せっ」と口説いたが、主計、奥島の二人、案に相違して守りは堅く遂に計画は駄目になった。

40分後に帰ってきた二人を加えて総勢7名。飯に、トランプに、苦労話にワイワイ騒ぐ。待望のウィスキーは仲良く一杯ずつ。民主主義を標榜する我が山岳部はやはりかくあるべきである。ラジオによると黄海に低気圧が発達したとのこと、明日は沈殿とする。食糧もたらふくあるし、計画どおり進んできて、大半は終了した気になって大いにたるむ。寝たのは何と翌日の1時。葛西曰く「縦走隊が来たら急に雑くなった。早く出発してしまえ」。

起床5：30、出発8：00～最低コル（葛西達と会う）10：00～10：30～涸沢岳11：45～穂高冬期小屋12：00

4月12日（吹雪後ミゾレ）

昨夜の疲れで9時に目ざめて見ると、案の定雪降り。こう思惑通り事が運ぶと気味が悪い程だ。又トランプに熱中。岩本さんと葛西のご両人、タバコがきれて青い顔をしている。己が屋根裏から見つけ出したシケモクの罐に目の色を変えて飛びついた。

天気は一日雪。3時頃よりミゾレに変わる。ベトベトした新雪が20cm程。天気図は複雑で良く分からないが、明日も見込薄らしい。夕刻出発に備えて装備、食糧の点検をする。麻ザイル、テントのポールはサポート隊に降ろしてもらうことにする。肉は今日で皆無、野菜、調味料も足りないので、この上沈殿が続けば少し節食を要する様だ。

就寝7：00

4月13日

遭難当日、この日以後は「遭難報告書」に載せましたので省きます。それに二度と書く気がしません。

以上の行動を精神的負担より考えたとき、次の4つに区分できると思う。

1）松本より日大小屋まで
重荷とラッセルに体力消耗したが、まだまだ先があったので大いに張り切っていた。

2）日大小屋より北鎌尾根、槍ケ岳肩の小屋まで
難場に全く体力を使い果たして、小屋へ転がり込んだ。北鎌尾根は予想より簡単だったし、半分は終わったと云う気分だった。
槍沢サポートの連中に会えたことも今迄の緊張の大いにほぐれた原因だった。

3）肩の小屋より穂高小屋まで
2）での疲れは一週間近くの沈殿ですっかり解消した筈なのに妙に疲れた。そろそろ疲れが蓄積してきたのかもしれぬ。最難関と考えていた北穂高岳の登りも終わったし、穂高の尾根も難しい所はすっかり通り抜けたつもりだった。そこで大いにたるむ結果になった。

4）そして遭難。
難場はすっかり通り抜けた気でいたので葛西達から吊り尾根の難しい事を話されてもピンと来なかった。非常に残りの行程を安易に考えていた。それにうまくゆけば一日で上高地へ、その為には最南峰迄の縦走をやめて前明神沢から降りても良いと岩本さん、国啓さんは考えていた様だ。ここ迄来たら、もう縦走の完遂よりも早く里に降りることが先決になっていたと思われる。槍を過ぎた頃から三人の間でともすれば家の話でもち切りであった。

この様な精神的な推移を考えても、無理からぬ事とは思えるが、当時の我々としては“100里の道を行くものは90里をもって半ばとす”といった真理が全く念頭になかった。

最後に私としては出来るだけ詳しく、いろいろな面からこの山行を述べて見たつもりです。今は亡き二先輩にも非礼をあえてした所があったと思います。お許し願います。合掌再拝して冥福をお祈りします。

春山合宿遭難報告

4月13日（快晴無風）

4時半ごろ起床、期待していなかったが、晴れているので急いで準備する。

団体装備

岩本（食糧1日半分）

伊藤（ナイロンザイル40m一本、三人用冬天、三つ道具、アブミ）

後藤（ラジュース、シャベル、コッヘル、ビニールシート、食器）

荷は三人とも大体平均しており、5～6貫程、今までより幾分軽くなっていた。

着用装備

各人共　オーバーズボン、オーバーシューズ、オーバーグラブ、アイゼン、ピッケル等

暖かかったのでヤッケは着ずにスポーツシャツ、ジャンバー等を着用。

6時半、穂高小屋を出発して奥穂高岳へ向かう。うまくいけば今日中に明神岳をまわって上高地へ降りられるというので、全体の気持が今までより緩んでいたことは否めなかった。小屋上のハシゴのあたりはカチカチの氷でアイゼンが滑る。強く踏んでやっと刺さる程度だ。ピッケルの石突は強く突かねば入らない。しかし、表面の5cm程が氷化しているのみで、その下は軟雪である。恐らく前日のミゾレが夜間の冷え込みでこんな氷を作り出したのだろう。

30分で奥穂高岳頂上に着く。頂上では写真を写すなどのんびりして（出発時間不明、おそらく20分頃）吊り尾根を通って前穂高岳に向かう。吊り尾根第一峰は稜線どおし。第二峰涸沢側は大きな雪庇が張り出し、雪は軟らかい。稜線、岳沢側（後で相当下方まで氷化していたと判明）は例の氷状のクラスト。稜線どおしに下り始めるが、伊藤が「トラバースしたほうが良かった」と言いながら、伊藤、後藤、岩本（縦走中ずっとこの順だった）の順で下り始める。しかし、断っておくが、今までの所と比べて格段難しいところではない。7時半ごろ、伊藤、頂上より2mほど下り、尾根上の雪面より岳沢側の岩のほうへ足を出し、かかとより滑って（恐らく岩と氷化した雪とのなじみが悪く、そこだけ軟らかかったのだろう）尻餅をつき、そばの岩に手をつく。その岩の上には透明な氷が張っていて滑り、岳沢側の雪面に落ち10mほど滑って見えなくなってしまった。その間すごいスピードで途中の岩に2・3度ぶち当たり、身体は2～3転して、ザック、手袋が飛び散るのが見えた。

全くアッという間の出来事で、私はピッケルにしがみついてぼんやりしていた。岩本の声であわてて二峰の頂上に戻る。岩本は直ぐに一・二峰のコルより沢を下ろうと言う。私が「ザックは?」と尋ねると「伊藤は気絶しているから早く下ろう。縦走はこれで中止だ。荷をもったまま上高地へ行こう」と言う。自分はこの時初めて事故の重大さに気づいて、黙々と彼の後に従う。後で考えれば、ザイルを持った伊藤が転落した現在、未知の沢（滝沢とは分かっていたが……）へ荷を持ったまま降りることは明らかに無理である。自分が今少ししっかりしていたら強い言葉で止めえたであろうと思うと残念でならない。

沢の上部はゆるく30度位、相変わらずカチカチの氷だ。岩本のピッチが非常に速い。

80mほど下った所の雪面に血が流れているのを見て、岩本は「伊藤は怪我をしているな」と叫んでますます速く降りる。常に慎重すぎるほど

ゆっくり下る彼だった。さらに100mほど下ると、下のほうで沢が屈曲しているらしく、急になって見える。今までピッケルを後ろについてグリセード式で下っていた岩本は、ピッケルを利き手に持ち替えて、ジグザグにコースをとり、私は遅れていたので真直ぐに降りてようやく追いつこうとした。沢の中央に岩本、下に向かって左側に私の状態になったとき、沢の上部で小さな氷片が落ちるカラカラという音を聞いたので、振り向くと下のほうでザーと言う音がした。見ると岩本がバランスを崩して滑っている。直ちにピッケル制動の体制に入ったのであるが、氷が硬く、止まらずに滑っていく。私は思わず「岩本さん、頑張れ！」と叫んだが、遂に姿を消していった。

しばらく呆然としていたが、気を取り直して「岩本さん、岩本さん」と続けてコールをかけたが応答は無い。急に言いようの無い不安に襲われて、あわてて沢を登りなおし、途中の岩陰に雪を切ってザックをデポする。そこで涸沢サポート隊のことを思い浮かべる。直ぐに沢を降りたくても、二人が相次いで転落したことを思うと一人ではとても自信が無い。涸沢サポート隊に連絡して、アンザイレンした上で降りようと決心して、ピッケル一本で稜線へ出る。この間何度もコールを掛けるが応答無し。ここで時計を見ると7時40分だった。奥穂を越え、ザイテン・グラードを下る。ザイテン上部で涸沢サポート隊が涸沢小屋付近に居るのが見え、コールをかけたが聞こえなかった。ザイテンをアイゼンでグサグサもぐって降りながら二人は生きていると思った。特に岩本は何処かで止まって岩陰にでも避難しているにちがいないと思って、なお一層あわてた。

彼等に追いついたのは、涸沢ヒュッテと本谷出合の中間点で、8時40分だった。サポート隊のリーダー葛西と相談のうえ

○主計　松本に連絡のため、空身で上高地へ走る

○葛西　上高地で強力なメンバーを編成して、岳沢より下から大滝付近を捜索

○奥島　サポート隊の荷をここから横尾まで下ろす

○後藤・出島　再度稜線まで引き返し、現場より可能な限り下って捜索をする。食糧（パン、ピンチフード）装備（ザイル2本、三つ道具、アブミ、捨て縄）

以上のことを決定して行動に移す。

私と出島は9時40分に出発、ラッセルは苦しく、涸沢小屋へ10時15分、ザイテンの取り付きでは、危うく雪崩に出会う所であった。春の日差しが強烈なので、雪が緩み、いたるところから小雪崩が出始めた。この分では岳沢側も下れるかどうか怪しむ。ワカンを付けても膝までもぐるラッセルを出島一人で引き受けてくれて大奮闘。尾根を登りながらも二人は何処かで生きているに違いない。案外無事で上高地へ降りていて、俺達に「なに、少し近道をしただけさ」とでも言うじゃないかと思った。特に岩本だけは、うまく稜線に這い上がって、今にも穂高小屋の鞍部に下りてきそうに思えた。自分達のラッセルの音がコールでもしているように聞こえて、何度足を止めて春の日差しにギラギラ光っている吊り尾根を眺めたことか。このときほど美しい山は見たことがなかった。穂高小屋へ12時10分に着き、エッセンをとる。二人とも疲れていて、吐き気をもようしたほどだ。食糧が少ないので雪標山岳会のデポより一部を貰う。13時出発、奥穂高岳頂上へ13時45分、日差しのため、雪はもうグサグサで、日陰のところに午前の氷の状態をとどめているだけだ。

一・二峰のコルよりザイルを着けて、スタッカットで降りる。2ピッチ半（40mザイル）でザックのデポ地に着き、ハーケンで別のところに固定する。（14時半）暖かかったせいか、至る所の岩の上を水がザーザー流れていた。午後の日差しが強烈で、雪は至る所からスノーボールが落ち始めた。足首より深くもぐったので危険は無かったが、その下は固いクラストだった。始め雪崩を恐れ様子を見たが、大きなものは出そうにも無いので、なるべく日陰の沢を選んで下った。ザックよ

り10ピッチ（所々コンテニアスを交えたが）で20mくらいの滝に出る。このあたりから伊藤のオレンジ色のオーバーズボンが見えた。滝の右側を2ピッチで下る。滝下よりコンテニアスで250mほど下り、二人を見つけたのが、16時25分だった。

生存の可能性は無残にも打ち破られた。二人とも明らかに即死であった。雪は血で染まり、あたりに飛び散った遺品は、激しい墜落を物語っていた。岩本の下10mに伊藤があった。雪崩の少ない所へ動かそうと思ったが、あたりにはデブリがなく、あとで現場の写真を撮ることが大切と思いそのままにして、アイスハーケンを南稜よりの岩に打ち、ザイルで2遺体、遺品（伊藤のザック、ワカン、手袋片手、ナイロンザイル、岩本のカメラケース、帽子）を結びつけた。

17時15分、しばしの黙祷を捧げ、迫り来る夕べの影に追われて、二人に別れを告げ、上高地に向かう。大滝（ドンズマリの滝）の降り口まで約百メートル。滝は手持ちのハーケンでは下れないとみて、滝左岸のブッシュの中をザイルを着けず、トラバースして、滝沢の一本南の沢に出て岳沢をアイゼンで下る。足首から膝までもぐった。森林帯で迷い。新しい足跡（葛西のものだった）をたどり河童橋へ20時半、アイゼンを外し木村氏宅へ21時に着いた。葛西、主計に悲報を伝え、松本に連絡、警察関係にも詳しく説明した。

●ミズバショウ